

知識とは、その人の“思い”

[評者] 井部俊子 聖路加看護大学学長

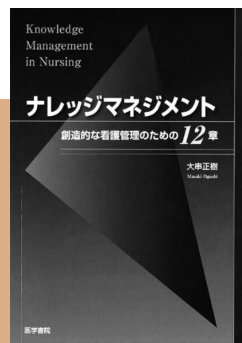
ナレッジマネジメント 創造的な看護管理のための12章

大串正樹 著

A5判, 228ページ

定価 2940 円(本体 2800 円+税 5%)

医学書院 TEL. 03-3817-5657



■“なぜビジョンが必要か”から“独自性の付加と論理的整合性の獲得”までの12章

本書の「創造的な看護管理のための12章」は次のように構成される。

第1章は、ビジョンの話である。なぜビジョンが必要なのか、よいビジョンとは何か、ビジョンをどのように活用するのかを語り、マネジメントを方向づける知識として位置づける。

第2章では、問題点を明らかにし、情報を活用して、自らを位置づけることで、現状を分析することを語り、問題解決の方法論を示す。

第3章は、リーダーシップを語り、ジェネラリストの知の特徴と判断力としての知が説明され、「自分を知る」章である。

第4章は、部下の知識を知り、キャリアをデザインし、動機づけることで知識資産をいかにマネジメントをいかにするかが説明される。

第5章は、知識の特性を知り、看護の知を考察し、継続教育がマネジメントの核であることを語り、学びを支援することとは何かについて言及する。

第6章は、場とコンテキスト、信頼とコミットメントが語られる。そしてこれらが雰囲気をつくることになることを知る。

第7章は、組織をデザインし、デザインを調和させ、エンパワーメントの形を語る章である。

第8章は、プロセスの意味、プロセスとしての知識、状況判断の重要性を語ることで、業務の積み重ねと変化への対応をプロセスで捉えることを示す。

第9章は変化のためのプロセスデザインとしての企画が語られる。目標を定め、工程表をつくり、

プロジェクトを見直す。

第10章は、日常業務を創造的にし、知の共有と協働を行ない、対立を乗り越える方法論を示し、業務の実践を語る。

第11章は、実践の評価である。その多様な評価方法や評価のフィードバックが説明される。

第12章は、ナレッジマネジメントの理論編である。ここで、ナレッジマネジメントの本質、知識とは何かが哲学的に語られる。著者が「野中郁次郎氏と10年近く続けた議論」の結果生まれた「独自性の付加と論理的整合性」を獲得した迫力ある章であり、本書全体を引き締めている。

■暗黙知は暗黙知のまま共有すればよい

本書の帯を執筆する際に、私が選んだキーセンテンスがある。それらは、「知識とは“思い”である」「“部下を知る”とはどのような知識をもっているかを知ることである」「暗黙知は暗黙知のまま共有すればよい」「知を活かす組織とは、最も必要な知の実践を最適なタイミングで提供していく組織である」などであった。これらは少なからず筆者の心をゆるがした。

「知識とは思いである」ことは第5章で説明される。一般に知識とは、正当化された真なる信念であるが、正当化や真なる“真理”という概念についてはいまだ議論の途上にある。しかし「知る」という事態は、それが信念(思い)であることだけははっきりしているという。そして著者は、「知識とはその人が思っていないければ、知識とはなり得ないのです。そこに主体的な関わりが欠かせないことを示唆しているのです」という。各章には実に味わい深い著者の「思い」が詰まっている。